

[医療と介護をつなぐ情報誌]

季刊

solasto

No. 06
2014 SPRING

特集
急性期病院と地域医療連携
— 院内完結から地域完結を目指して



医学部5年生のときに見学した在宅医療の現場には、自分らしさを失わず穏やかに暮らす患者や家族、それを支える医師の笑顔が溢れていた。「自分のやりたい医療はこれだ!」と閃いて約12年。荒井康之氏は在宅医療支援診療所の院長となり、地域で暮らす人々の生活をサポートしている。

ドキュメント

在宅医

熱い使命に燃える!



「生きいき診療所(ゆうき)」は2008年に開設。全棟老人保健施設「生きいき倶楽部」訪問介護事業所「生きいきケアセンター」など法人内の事業体が開設している。



医療法人アスミス
生きいき診療所・ゆうき 院長

荒井 康之氏

2003年自由医科大学卒業。茨城県立中央病院、埼玉県川口総合病院七会診療所など茨城県内の医療機関で地域医師に在籍。2012年4月より現職。日本内科学会認定内科医、日本プライマリケア学会認定家庭医、日本在宅医学会認定在宅医療専門医、介護支援専門員、2級福祉住環境コーディネーター、若手医師のキャリアアップを支援する茨城県地域医療支援センターのキャリアコーディネーターも務める。

“その人らしさ”に向き合い 「病気とともに生きる」を支える

午前は外来、午後は訪問
時間外は“部活動”に励む

午前中は外来でさまざまな事情を抱えた患者を相手に、診療、相談はもとより、各種書類作成、健康診断、セカンドオピニオンなどにも対応する。「健康に関する困り事はすべて受け付け、解決できる場合は解決し、できない場合は適切な機関につなぎます。地域の保健室を目指していますし、そう呼ばれるのが誇りです」と語るのは生きいき診療所・ゆうき院長の荒井康之氏。

この方針は、特に力を入れる在宅医療に関しても同様だ。毎日午後の時間帯を訪問診療に充て、年齢も疾患も病状も異なるさまざまな患者の自宅を、看護師とペアで1日5～6

件訪ねて回る。在宅患者は80名余りで推移。これを同僚の医師と半分ずつ担当している。

訪問が終わると診療所に戻り、その日の仕事の整理とミーティング。「毎日慌ただしいですが、スタッフがよく頑張ってくれています」と感謝する。さらにその後もほぼ毎日、1人、診療所に戻る。講義準備や原稿執筆、世話人として参加している地域の多職種連携の会、「結城市地域ケア研究会」(三木次郎代表世話人)の準備などを行うためだ。

診療以外のこうした活動をひっくるめて荒井氏は“部活動”と呼ぶ。「有志による自主的な活動で、時間ができし、楽しくて人間形成にも役立つ。まさに部活動そのもの」というわけだ。

患者の希望を優先しながら
介護者の献身を讃える

訪問診療の対象は、茨城県結城市全域と、隣接する栃木県小山市の一部。那珂を越えての活動になるが、違和感や不都合を感じることはないという。「結城市と小山市は親密ですから」と荒井氏。「この2つの市の出来となった小山氏とその分家に当たる結城氏は西暦700年頃から長らく一体となって来たのです」と、赴任するたびに読むという地元の歴史書から得た知識を披露し、「地域の成り立ちを調べるのが好きなんです。患者さんとの会話ははずみずみ」と顔をほころばせる。

こんな荒井氏が在宅医療に取り組むにあたり最も大事にしているのは、「その人らしさ」を尊重すること。「医学的に正しいことがその人にとってベストチョイスではないことが在宅の現場ではよくあります」と指摘。「たとえばヘビースモーカーの患者さんの場合、

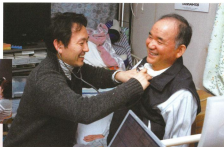


訪問時間や地域と異なることもある。この日はアスムスの訪問看護師と患者宅の職員で話し、言葉をかかわした。



てくわった患者について、かわったスタッフが集まって話し合う「振り返りカンファランス」の様子

「元気を測けるのも自分の仕事」と言う奥村氏は、常に明るく笑顔を絶やさない。このセッションに参加は少し戸惑ったという男性患者だが、「いまではもう大丈夫。先生についていきます」と元気に話している奥村氏。



患者に呼ばれた部屋で看護員とともに大急ぎの応急処置をしているところ。手術の直後はこの場で交際し、ケアの仕方についてティナー・ビススタッフなどに指示を出す



ときには整形外科訪問科に同席することも。写真は二本木氏の二本木内科クリニック。二本木氏は一棟二層の地域ケア研究会を運営する神岡でもある



自宅では小型のモニターで機材をよく活用する。写真は奥村診療室



「患者さんに安心感を与えない」という思いで在宅医療専門医など各種認定証を複数取得

タバコが吸えることが元気のバロメーターにもなります。ですから、薬理の必要性を伝えつつ、タバコを楽しむ暮らしを後押しします」と続ける。

また、家族をはじめ介護者をねぎらうことも、日々心掛けて実践している。患者の妻を目の前に、「奥さんあつての〇〇さんですよな」と本人に話しかけ、さりげなく介護者の疲身を語ったりする。

あるとき、90代の母親の皮膚の赤みを抑えようではないかと心配していた女性に、診察の後、「ちょっとした皮膚病ですから心配ご無用。そもそもこれだけきちんと介護されているのだから、抑えようとは無縁でしょう」と笑ってみせる。介護者はちよっぴり誇らしい表情になった。「次の訪問まで、前向きに介護を頑張ってください」という奥村氏の気持ちも伝

わったのかもしれない。

現場見学を機に在宅に興味 今後は地域づくりの強化を目指す

奥村氏と在宅医療との付き合いはいまから12年前、医学部5年生のときに遡る。ひょうな線から医療法人アスムス理事長、太郎秀樹氏の訪問診療を見学。「こんなに穏やかで笑顔溢れる医療現場があるのかと、目からウロコでした」というこの体験を機に、「病氣とともに生きることを支える医療」を志向するようになった。

「それと、年齢や病種の種類、状態の如何に関係なく、どんな人も診よう、という気持ちになり、目の前の患者さんが抱える問題を解決することに喜びを見出すようになったのは、いわゆるへき地診療所で2年間の経験が大きいですね。ここでは

住診も日常的に経験し、在宅医療への興味はさらに深まりました」と懐かしそうに振り返る。こうした経験を活かすべく2012年4月にアスムスに入職、生きいき診療所・ゆきを任せられることになった。

今後は診療技術を高めつつ、地域づくりにも一層力を入れていきたいという。

「勉強会などを通じた顔の見える関係づくりと、一つひとつの症例を通じた関係構築の連携を強化するほか、病院の医師とも交流を深め、スムーズな在宅移行を進めていきたい」と将来を見据える奥村氏。一番の希望は、地域住民に在宅医療の良さ伝えること。「そのためには、自分もあんなふうに通じたい、と思ってもらえるような症例を、仲間と一緒に積み重ねていきたい」と力をこめる。